

●出力:200W(2~8Ω) ●入力感度/インピーダンス:1.45V/50kΩ ●寸法/重量:W240×H205×D400mm/25kg ●備考:オプションでデジタル入力対応モデルTelos200-D(¥1,900,000・ペア)あり。Telos200からTelos200-Dへのバージョンアップ(価格未定)あり。バランス入力HOT=2番ピン ●問合せ先:ステラヴォックスジャパン(株) ☎03(3958)9333

ゴールドムンド Telos 200

¥1,700,000(ペア)



柔らかなく上品なサウンド。繊細で穏やかな表現
ゴールドムンドより、テロスの名を冠した弟機、テロス200登場

三浦孝仁

本機の登場で、テロス2500を頂点に極めるパワーアンプのラインナップが完結するのだろう。製品としてのクラスを考えると、テロス200は小型で特に日本市場で好評を得ていたミメイシス18・4MEの後継機種に相当する。ヒートシンク内蔵で増幅回路も上級機同様「JOB5」へ変更(18・4MEはJOB4)となっっているのが、完全な新規設計と見るべきである。

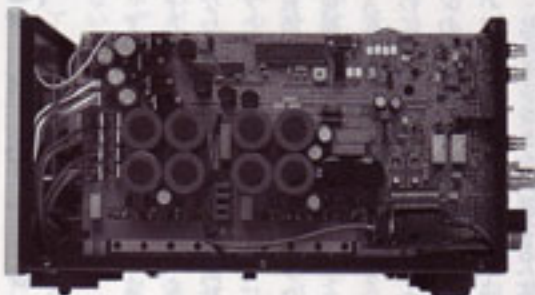
本機はテロス600/2500の開発で確立されたゴールドムンドの「レオナルド・リサーチ・プログラム」に基づいてデザインされた。すなわち、各ステージの直線性を高めてア ইস トリーションを低減し、わずかな歪調の発生も抑えるという積極的な音質改善策の投入だ。具体的には2MHzという広帯域特性の実現と、4基のハイスピード電源トランスによる供給能力の拡大、そして出力段の温度を均一化する進化型サーマル・グラウンディング構造の採用などである。バイポーラ・トランジスタを搭載したミメイシス18・4MEと異なり、本機はテロス・シリーズ共通のエキシコン製パワーMOS・FETによる4パラレル・プッシュプル構成の出力段。かつてゴールドムンドは日立製パワーMOS・FETを搭載していたが、エキシコンの素子は日立の素子と完全互換といわれ、



中央にWBT製スピーカーターミナルと、ゴールドムンド社製スピーカー専用端子を配置。左側には3dBステップ7段階のゲイン切替ノブとアンバランス、バランスのアナログ入力端子、デジタル入力、デジタルスルーアウト端子を備える。なお、デジタル用入出力端子はD/Aコンバーター搭載モデルでも装備される。



ゴールドムンドとしては珍しく、ヒートシンクを本体内部に格納したレイアウト。左側には4個のトイダルコアトランスを格納したシールドケースを、右側に増幅部を配置する。



側面から増幅基板をみる。電源基板と増幅基板を分けた上級機とは異なり、すべての回路を1枚の基板上にレイアウト。電源部の平滑コンデンサーの容量を可能な限り少なくすることで、増幅回路への電流供給速度を高めているという。

開放的に拡がるステージ 余韻を丁寧に描き出す

ている。

アキユフエーズのC2810プリアンプとソニーのSACD/CDプレーヤーSCD・DR1を接続して、テロス200の音を検証した。モニタースピーカーはB&Wの8000Dである。入力を比較した結果、シングルエンド接続で聴くことにした。

開放的に拡がるサウンドステージは、モノプ

ロクク機ならではの気持ちよさである。ロシア生まれのジャズ・ヴォーカリスト、ソフィー・ミルマンのセルフタイトルCD（ピクチャーエントテインメント）は、ハイエンドまで伸びたメリハリある音が特徴のディスク。同じCDで鮮やかな音の表情を印象づけた、記憶の中のミメイシス18・4MEと比較すると、B&Wの8000Dで聴くテロス200は物腰の柔らかい上品さを持つとしていられるように思う。ヴォーカルの口の動きは繊細で、艶やかさの表現もうまい。その音像もコンパクトにまとめているが、

フォーカスをキリリと締めるのではなく、量感を確保してボディの存在感を印象づけるといった具合。音が消え入るまでの余韻を丁寧に描き、強調感を与えない程度に音像のエッジを立てている。PAMOS・FETの音質的な特質が反映されていると思われる、暖かな音の表情を得意にしている。

スピーカーとの相性が考えられるが、しばらく聴いてから試しに背面の入力ゲインを調整したところ、感度を高めるに従って音の切れ味が増し、音像の彫りを深く描く傾向になるという興味深い変化要素を発見。プリアンプ側の音量を絞ることになるが、こうすることで自分が思い描く「ゴールドムンドの音」のイメージに近いことができる。